

# 一、「多久茂文」とともに 多久の文教の歴史をたどる



多久茂文は、佐賀一代藩主鍋島光茂の三男として生まれ、その後、多久茂矩の養子となり、貞享3年（1686年）に17歳で家督を継ぎ

四代領主となりました。

若い頃から学問を好み、儒学者・武富威亮・佐賀藩の儒臣・実松元林に学びました。のちに多久の領主となり、元禄12年（1699年）、茂文が創建した東原庵舎は、人々に学問の大切さを説き、文武両道の精神のもと人材育成に寄与し、多くの偉人を輩出しました。

## 二、人々の心を 救おうと創建した 「多久聖廟」

江戸時代、多久領は財政的に恵まれない、民の心は荒んでいたといわれています。多久四代領主を継いだ茂文は、多久領を治めるためには教育が必要と考え、宝永5年（1708年）、学問の象徴として孔子を祀る多久聖廟を創建しました。  
以来、約300年間、住民の精神的シンボルとして今も大切に保存されています。

### 多久はなぜ「文教の里」となったのか





### 三、100年後の未来を予測していた、 日本電気通信の先駆者「志田林三郎」



志田 林三郎博士



志田 林三郎博士生誕記念イベント「おもしろキッズサイエンス」

東原摩舎からは、鶴田斗南や高取伊好など、日本や郷土のために尽くした偉人が数多く輩出され、その一人に現代のエレクトロニクス技術を予測していた志田林三郎がいます。

林三郎は安政2年(1855年)、東多久町に生まれ、幼い頃から『神童』と評され、身分制度の厳しかった当時において、異例の待遇によって教育を受けました。進学した工部寮(現・東京大学工学部)を主席で卒業後、イギリスに留学し、大学より最高の実験研究に贈られる「クレランド金メダル」を授与されるなど、わずか一年の在学中に数々の功績を残しました。

帰国後は、工部大学校初の日本人教授・工学部長に就任。人材育成と電気工学に尽力。明治21年(1888年)には日本初の『工学博士』となり、電気学会創設講演で語った未来予想には、テレビや携帯電話などがあり、林三郎の先見性は、現代においても高く評価されています。

## 「文教の里」が生んだ偉人と 今に受け継がれるその心



### 四、文教の里に 受け継がれる心

多久市では、「論語カルタ大会」や「論語の素読」をはじめとする、文教の里ならではの特色ある教育の輪が広がっています。孔子の教えである、人としての生き方が書かれた論語は、礼儀正しさや思いやりの心を育むとともに、一般の教育だけでは得ることのできない「学ぶ楽しさ」も教えてくれます。

論語を学ぶ子どもたちの活躍は地域にも広がり、市内の小中学生がボランティアで多久市の観光名所や歴史を案内する「孔子の里ジュニアガイド」など、300年前に人々の心を救った文教の精神は、今なお受け継がれています。



論語カルタ大会

論語カルタとは、孔子の教えである「論語」を百人一首形式にしたもので、楽しみながら学べるよう、平成12年に考案されました。現在では市内外を問わず多くの参加者があり、白熱した競い合いが繰り広げられ、市を代表するイベントとなっています。

